

Opportunity to gain valuable experience and insight into the latest technology for radiology

がん研究会有明病院 三輪 建太

スタンフォード研修における最大の収穫は、「人」との出会いであった。高い志をもった20人の研修生、スタンフォード大学の医療従事者や研究者、本研修をサポートして下さったGEHC-Jの関係者との触れ合いの中で、今までとは違った多様な価値観に触れることができた。また全国にはスキルアップを目指して頑張る優秀な方が大勢いることを改めて実感し、同じ診療放射線技師の仲間として喜ばしいとともに、刺激的な出会いであった。こうした出会いは、これからの私の人生にとって、大きな糧になると確信している。

1. 学会の国際化と学術大会のあり方について(私たちが目指すべき学会)

近年、グローバリゼーションが急速に進展する中では、医学と医療の国際化は避けは通れない。スタンフォード研修生とのディスカッションの中でも、多くの日本放射線技術学会員が学会の国際化の必要性を十分に認識している様子が窺えた。しかし国際化という言葉自体が極めて曖昧であるために、学会がどのような国際化を目指し、それに応じて実務レベルでどのような活動を実施又はサポートしていくのかが一学会員として気になる点である。私個人の見解としては、学会のサポート等を受けて海外研修や国際学会に進んで参加し多文化に触れることで客観的に自分を見つめ直すことができ、さらに学術面での自己研鑽の蓄積になると考える。こうした学会員個々の研究能力のレベルアップが日本放射線技術学会の英語論文誌である Radiological Physics and Technology (RPT誌)への論文投稿の増加に繋がる。放射線技術学に関する国内の優れた研究成果をRPT誌を通して国内外に対して発信し、この領域を活性化することが、個人や学会が「国際的」なものとして成熟するための有効な方法と思われる。

2. 研修で得たことを今後どのように活かすか

スタンフォード大学では診療、教育、研究が細分化・専門化されており、システム自体が無理なく、自分の職域に専念できる環境が整っていた。また、職種や部門間での横断的な交流や協力が積極的になされており、人体や小動物を対象とした研究の立案・実施する上での敷居が日本よりも低く感じた。風土、生活、考え方、価値観が日本と米国とでは根本的に異なるため、日本に米国の制度や体制をそのまま持ち帰れば機能するようなものではない。しかしこの研修で発見した米国の良い点は、日本でも積極的に取り入れるべきである。特にPh.DとM.D.が互いの立場を尊重し協力し合いながら、医療の発展に寄与するための研究に取り組む姿勢は良い刺激になった。今後、本研修で得られた臨床・研究に関する有用な知識を日々の診療に還元していくたいと考えている。

最後に本研修に際して多大な尽力いただいた日本放射線技術学会、スタンフォード大学、GEHC-Jの関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。また、参加に快く送り出して頂いたがん研究会有明病院核医学チームの皆様に深謝申し上げます。



7T MRI の前にて